

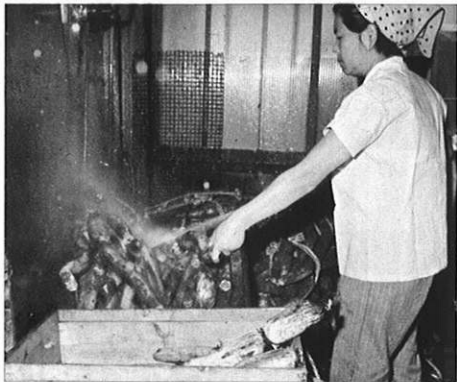
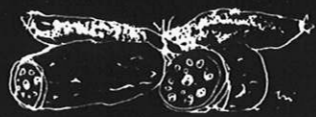
からし蓮根

さくさくした歯ざわりと、素朴な風味で食卓を飾る。からし蓮根。これは、蓮根にからしみそをつめ、衣をつけて油で揚げたもので、この調和したうまさには、「南国くまもと」の味といえるよう。

このからし蓮根は、加藤清正公時代には非常用食料として、また細川公時代には、蓮根の形が家紋に似ているところから、「お家料理」として珍重されていたと伝えられている。

最近では、東京・大阪・名古屋など大都市で、からし蓮根の実演販売を盛んにやり、この独特のうまさ好評で注文が殺到している。

空港やデパートのみやげ品売場、また、東京など遠隔地へ送る場合は、腐敗を防ぐため完全殺菌し、真空包装して送り出されている。



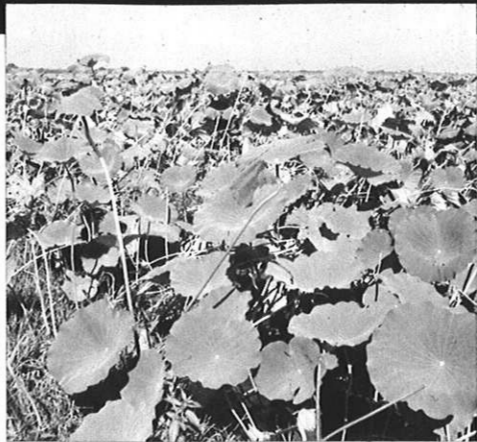
▶蓮根をまずキレイに水洗い...



▶からし味噌を蓮根の穴にムラなくつめるのがコツ。



▲ころもをつけてサッと油で揚げる。



◀城南地方に多い蓮根池。



▼観光みやげ品として大都市では特に人気を呼んでいる。



▲真空包装をすると2週間はもつのでみやげ品にもなる。

県有林を守る

★下益城郡砥用町
楠元 健蔵さん

九州の屋根といわれる五家荘連山の北口にある大露(おおろ)山団地。七十ヘクタールのこの広大な県有林の杉山は四十度の傾斜をもち、天候があやしくなるとすぐ濃霧に閉ざされてしまう。周囲の山峯は、杉、松に混って、ところどころ紅葉の集団が点在してそれが美しい絵模様をつくっている。ひと昔前は、こことくブナ、カエデ、ナラなどの雑木林で晩秋ともなればそれはそれは全山綿絵のように見事だったと楠元健蔵さん(六十六歳)は懐しげにつぶやく。楠元さんが県有林巡視の仕事に就いたのは昭和三十三年。初代は父親の徳次郎さんで、楠元さんは二代目だ。父徳次郎さんは、明治四十一年にこの県有林大露山団地のため土地買取を手がけ、いち早く、造林や管理造成につとめてその功績は大きく評価された。そして大露山団地の初代巡視人として大正元年から昭和三十三年まで営々と山を守ってきた。

九州の屋根といわれる五家荘連山の北口にある大露(おおろ)山団地。七十ヘクタールのこの広大な県有林の杉山は四十度の傾斜をもち、天候があやしくなるとすぐ濃霧に閉ざされてしまう。周囲の山峯は、杉、松に混って、ところどころ紅葉の集団が点在してそれが美しい絵模様をつくっている。ひと昔前は、こことくブナ、カエデ、ナラなどの雑木林で晩秋ともなればそれはそれは全山綿絵のように見事だったと楠元健蔵さん(六十六歳)は懐しげにつぶやく。楠元さんが県有林巡視の仕事に就いたのは昭和三十三年。初代は父親の徳次郎さんで、楠元さんは二代目だ。父徳次郎さんは、明治四十一年にこの県有林大露山団地のため土地買取を手がけ、いち早く、造林や管理造成につとめてその功績は大きく評価された。そして大露山団地の初代巡視人として大正元年から昭和三十三年まで営々と山を守ってきた。



イ愚痴が出てしまうのだ。

二本杉茶屋のころ

「二本杉の茶屋」と言えば、五家荘の山を歩いたことのある山男にとっては思い出多い「ベースキャンプ地」。この茶屋は楠元さん一家が昭和十年に開設したもので楠元さんはこの二本杉を足場にして、県有林の巡視業務と同時に、山間生活者のための雑貨商を営んできた。泉村と砥用町の境にある山頂のこの茶屋にはかつての河童随事や有名な佐藤垢石が籠にかつがれて立寄りたり、植物学の上

妻博之先生が学生をいっぱい引き連れて植物採集のため合宿したりしたなど楠元さんにとってはユニークな挿話とともに忘れ難いひとこととなっている。昭和三十六年楠元さんは二本杉を下った。六十一年杉を切り出した後の淋しさもあって、昭和三十三年に楠元さんは二代杉造林を行なった。「オレが生きてるうちに……」と言った父の言葉が実感として甦ってくるのだ。晩秋の空を垂直に切つて伸びる県有林をふり仰ぎながら楠元さんは胸の中で確かめるのだ。県有林はわが山……と。

下刈から人夫の手配まで

楠元さんは長い下刈り鎌を肩に一人山中を歩く。夏は草丈が伸びて歩きにくい、冬は調子がよい。出発はいつも朝八時。山をひと廻りするの半日はかかる。最大の注意事項は、盗、誤伐の監視。森林火災防止。病害虫発生予防。親子二代これまでのところ異常なしというのが誇りだ。このほか、六月初旬から九月にかけて下刈り、つる刈りの作業がある。三月の造林時期は減法に忙しい。県の指導の下に植林、加植をやるわけだが、人夫の手配から作業の準備まで大変だ。だが県有林を預っているという責任感が仕事の疲れもツイ忘れさせる。

昔は、安い賃金でも、青年団の連中が資金づくりだといってよく働いてくれて、人夫集めの苦労なんかなかったんですが、この頃ではその若者も見当らんようになって……楠元さんは、足中(あしなか)を履いて短かい鎌で下刈りをしていた青年たちのことを想い出してはッ

「おやじの頃は、わたしが小学生から青年時代にかけてでしたけんよう仕事の手伝いばさせられました。よその巡視人